

(取材考記) 当事者の苦悩・頼もしさに接して 吃音の人、丸ごと受け止めたい 小若理恵

有料記事

2019年10月7日16時30分

言葉をうまく出せない吃音（きつおん）の人は世界人口の1%といわれる。これまでほぼ接点のなかった当事者に今夏、話を聞くことができた。

6月、大人の当事者の集まりに行った。一言、一言を振り絞るように話す人たちがいた。一様に、学校で話し方を笑われたり、言葉に詰まって業務に支障をきたしたりした経験を持っていた。それでもみんな前向きに生きたいと願っていた。心が揺さぶられた。

8月には、吃音の子どもとその保護者らによるキャンプに同行した。滋賀で開かれたが、沖縄や宮城、千葉からも来ていた。小学生から高校生までの当事者がいた。

幼いうちは、吃音の自覚がない子が多い。成長するにつれて話し方を注意されたり、からかわれたりして「みんなと違う」ことを意識する。吃音を隠そうとして無口になったり、会話を避けたりする。不登校や引きこもりにつながることもある。だから私は、来春小学校から中学校に行く小学6年生のことが気がかりだった。

話し合いの場でのこと。6年生は進行役の教員に「中学で新しく出会う友だちや先生に自分のことをどう伝える？」と質問された。「自己紹介の時に（吃音があることを）自分から伝えたい」「僕はしゃべりにくいけど、気にせず仲良くしてねって言うよ」と口々に答えた。とても頼もしかった。

その中に、初めてキャンプに参加した6年生の女の子がいた。話し方をクラスメートに笑われ、一人で悩んできたという。吃音の同学年の子のやりとりを黙って聞いていたが、「（吃音を）隠そうとしなくていいんだ」とほっとした表情を見せた。一歩踏み出せそうな彼女の姿がうれしかった。

吃音の原因ははっきりと分からず、治療法も確立されていない。言語訓練などで症状が出にくい話し方を身につける人もいるが、思うように改善しない人もいる。治すことだけが目標になると、当事者は苦しむばかりだ。その半面、周囲は当事者に充実した学校生活や人生を送ってほしいと願う。ならばこそ、当事者のありのままを受け止め、見守り、応援したい。そんなまなざしを向けられた当事者は、どんなに心強いだろうか。

(大阪生活文化部)